

三方ヶ原の戦い

三方ヶ原の戦いは徳川家康がいくつもの戦いを経験した中で唯一自分が戦死するかもしれない大敗でした（三方ヶ原は現静岡県浜松市北区三方原町）。

三方ヶ原の戦いは戦国時代の勇将で天下を取るのに最も近い男と言われた武田信玄との戦いです。

織田信長は桶狭間の戦いで勝利した後、甲斐国（山梨県）、信濃国（長野県）と上野国（群馬県）の一部を領有する武田信玄及び越後（新潟県）と越中（富山県）を領有する上杉謙信と同盟を結びます。

その後に足利義昭（将軍）を押し立てて上洛して、近畿圏を支配下に置きます（永禄11年—1568年）。

武田信玄は今川義元亡き後、衰退していく今川家の駿河国（静岡県）領有を図ります。

家康（当時は元康）は、今川義元と織田信長とは桶狭間の戦いでは義元の部将で参戦し、義元は敗戦しますが、家康は奮戦し、戦後三河の岡崎に戻ります。

家康は、今川とは手を切り、これまで敵の信長と手を結び同盟します。

信玄と家康は同盟して今川をつぶします。今川の領有の駿河国（静岡県中央部）は信玄、遠江国（静岡県西部）は家康で分け合います（永禄12年—1569年—桶狭間の戦いの後の9年後）。

信長の上洛も信玄の駿河侵攻も互いに同盟で了解済みのことでした。

ここで信玄は更なる領地拡大を目指します。

信玄は駿河国侵攻では今川に味方した関東の雄北条と反転、同盟を結びます。

東側からの北条の攻撃の憂いをなくして、家康との同盟を破棄して徳川領の遠江、三河への侵攻を目指します。

信玄は、信長と滋賀で戦闘中の朝倉義景・浅井長政や大坂で抗争中の本願寺とも同盟を結びます。

信長との同盟も口実をつけて破棄です。

ここで家康と徳川家（松平家）の躍進の情勢を見てみます。

徳川家は三河国（愛知県東部）の松平郷の豪族で、お父さんの広忠は三河の岡崎城を拠点にして、駿河の今川の傘下で、勢力を拡大します。隣国の尾張の織田家とは敵対関係でした。

この中で弘忠は幼少の竹千代を残して亡くなります。成人後の名は元信・元康・家康は6歳の時に駿府の今川に引き取られ養育され、今川の部将として育ちます。

ここで桶狭間の合戦があり、今川衰退の中で、岡崎で独立し、三河国を統一し、織田信長と同盟します。

松平元康から家康に名乗りを変えるのは永禄6年（1563）で、徳川を名乗るのが永禄9年です。

新領地の遠江経営のため本拠地を三河の岡崎城から遠江の浜松城に移します。

信玄は元亀3年（1572）10月3日に甲府を立ちます。それより先の9月29日に山形昌景隊を信濃、三河東部經由遠江に出軍させます。

総勢2万人とも2万5千人とも言われます。

徳川軍は8千人と信長援軍3千人で対抗することになります。

本軍の信玄は南下し、藤枝（静岡市藤枝）を通過（10月10日）して大井川の河口近くで川を渡り向きを西方に向けます。

大井川を渡りますと家康の領国遠江国です。家康居城浜松城は直線距離で60キロメートル位です（後掲「武田軍の遠江・三河推定侵攻ルート」ご参照）。

徳川軍拠点の高天神城を落とします（10月19日）。そしてそれより西方の天竜川の西側の袋井、見付、^{まぎさかだい}匂坂台あたりに陣を構えます。家康は浜松城か

ら兵3千人と共に出陣しますが、敗退して浜松城に戻ります。

信玄は天竜川上流の東岸に建つ家康軍拠点二俣城^{ふたまたじょう}を落とすために向かいます。二俣城は11月末に落ちますが、20日ほどかかりました。

支隊の山県隊^{やまがた}とは二俣城で合流します。

家康は二俣城後詰め（救援）のため出陣しましたが失敗して浜松城に戻ります。

二俣城は家康の浜松城の北方天竜川東岸にあり、直線距離で18キロメートル位です。

武田軍は12月22日の朝、南に向かって進軍を開始しました。

二隊に分けます。支隊（山県隊）は天竜川の西の笠井街道を南下します。

信玄の本隊はそれより西側の二俣街道を南下します。

浜松城の家康は武田軍は南下して浜松城を攻撃して来るものと思っていた。

ところが信玄本軍は浜松城の北方7キロメートルの有玉で右折して三方ヶ原の台地を上がり、支隊の山県隊と合流して北西に向かいます。

この三方ヶ原は当時味方ヶ原とも書き表され、今日表示は静岡県浜松市北区三方原です。

浜松城の北側にある東西10キロ、南北15キロ、標高は25～110メートルの台地です（浜松城も台地の南側にあると言えます）。

浜松城では軍議が開かれます。

家康の重臣も信長からの援軍の諸将も「武田軍2万5千に対し味方は1万1千、平地での戦いは多勢に無勢で勝ち目がない。素通りさせよう」と。

家康は「わが領国を踏み破って通ろうとする武田軍を多勢だからと言ってとがめないことがあろうか」と城から出て出撃を主張します。

家康としてはここで戦を避けては今後地元の豪族が離れてしまうことを憂慮しました。

家康の決意に重臣、諸将も同意しました。

徳川軍は浜松城から三方ヶ原に向かい、武田軍の後方に位置しようとした。

武田軍も気が付きます。先陣は三方ヶ原の祝田^{ほうだ}で止まります。これよりは台を下り坂となります。止まって陣を組みなおし戦闘態勢を作ります。

浜松城から祝田までは12キロメートルです。

徳川軍と武田軍は総軍全面戦争に突入します。夕方の4時の開始です。

徳川軍は犠牲者1千余人で大敗し、家康は暗がりの中命からがら浜松城に逃げ帰ります。

この戦いの戦場跡が祝田の坂上ではあるのですが、場所が特定できていません。現在記念碑はあるのですが、近年地元有志が建てたようです。

信玄は浜松城の北側1キロメートルの^{さいいががけ}崖まで攻めてきますが、浜松城を攻撃せず、翌日三方ヶ原の祝田坂を下りて^{おさかべ}刑部で滞陣し年を越します。

何故攻めなかったかです。

遠江、三河侵攻以来連戦連勝ではあるのですが、「家康軍は意外と手ごわい、浜松城攻めは1カ月やそこらで落とせない。ここでもたもたしては上杉や北条に隙を作ることになる。落とせそうな城を狙う方が賢明である。」考えたようです。

明けて元亀4年正月初めに三河国野田城を攻めます。家康は救援に向かいますが2月10日に落ちます。

時間がかかりすぎです。信玄軍は野戦は強いですが、城攻めはあまり得意でないことが分かります。

この後信玄は野田城の北方の長篠城に入り、滞陣します。

ここで信玄は動きません。

4月に入って信濃に向け撤退を始めます。

途中の信濃の駒場（長野県下伊那郡阿智村）で4月12日に病没します。

野田城攻めの時に鉄砲で撃たれた傷がもとで亡くなった説もありましたが、現在は病没が定説です。

野田城攻めの後発病（癌か）し、長篠城で養生していたが良ならず、甲府に帰る途中で亡くなったとの説が現在の定説です。

遺言で「3年間死を隠せ」との言い伝えがありますが、家康や信長は1か月位で知りました。息子の勝頼も隠したのは半年ぐらいでしょう。

信玄が長篠城撤退の後すぐに家康は取られた城の奪還を図りますが武田軍の進撃がないことに不信、探りを入れ死を確証したものです。

密かに信玄に組していた足利義昭将軍はその死を知らないで信長に反旗を翻します。そして天正元年（1573）7月に京を追われます。

信玄の出征の目的はなんだったかです。

従来の説は、「上洛して信長に代わって天下を治めるところ」が目的との説だったのですが、今日の研究者の説は、徳川領の遠江国と三河国の制覇まで、更に侵攻しても岐阜城への牽制までとしています。

上洛までは、信長の軍事力（尾張、美濃、近畿圏の領有）からして短期に信長制覇は無理で、上杉謙信の攻勢も気になりますし、北条もいつまで味方してくれるか分からない、更に朝倉も滋賀から越前へ撤退してしまいます。

長期戦は無理です。

この後信長は越前の朝倉、北近江の浅井を滅亡させ、更に長篠で信長・家康連合軍は武田勝頼に大勝します。

勝頼の武田滅亡後は家康は駿河国も領国とし、後の天下取りの基盤を作ります。

家康は同盟相手に信玄より信長を選んだことに先見の明があったと言えるでしょう。

苦戦を覚悟しながら信長との同盟を最大重視したことが、後の天下取りにつながった戦いでした。

それでは最後に「しかみ像」（後掲参照）のいわれについて話します。

正式には「徳川家康三方原戦役画像」（徳川美術館所蔵）と言います。

浜松城に逃げ帰った家康が、この敗戦を肝に銘ずるために自らを描かせた絵とされていました。

この絵は尾張徳川の九代藩主宗睦の世子治行のもとへ正室よりひめ従姫が紀伊徳川家から嫁いで来たときの嫁入り道具として持参してきた画像と分かっています。

この絵を家康が三方ヶ原で負けた時の自画像と言いだめたのは明治末のことです。

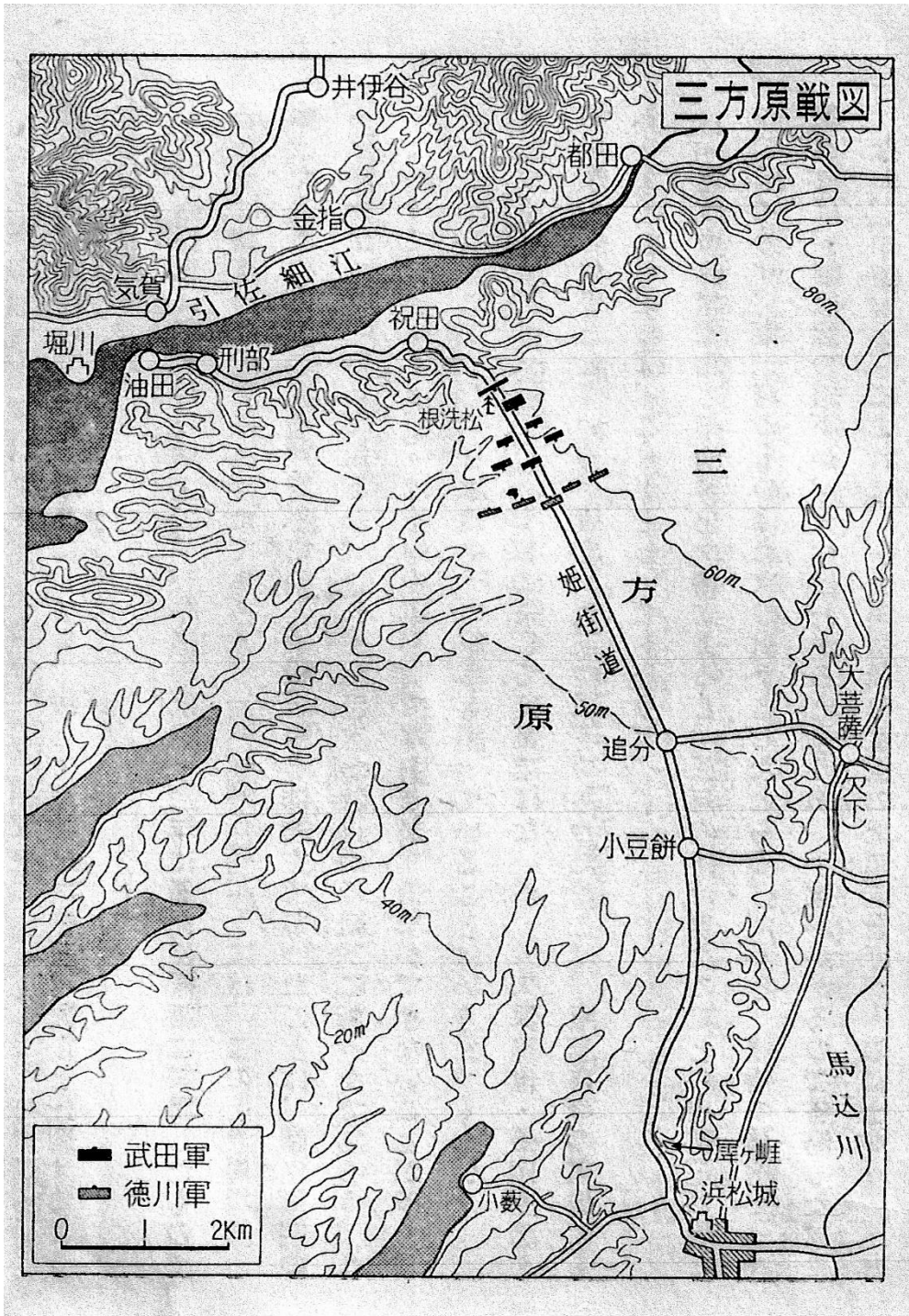
戦闘が12月の末（現在の1月末）の極寒の時に家康が足袋をはかず素足の絵とはおかしい。

この絵は後世に誰かが描かせたものとの説が広まっています。

以上

2023年7月13日

梅 一声



高柳光壽著「三方原之戦」より転載

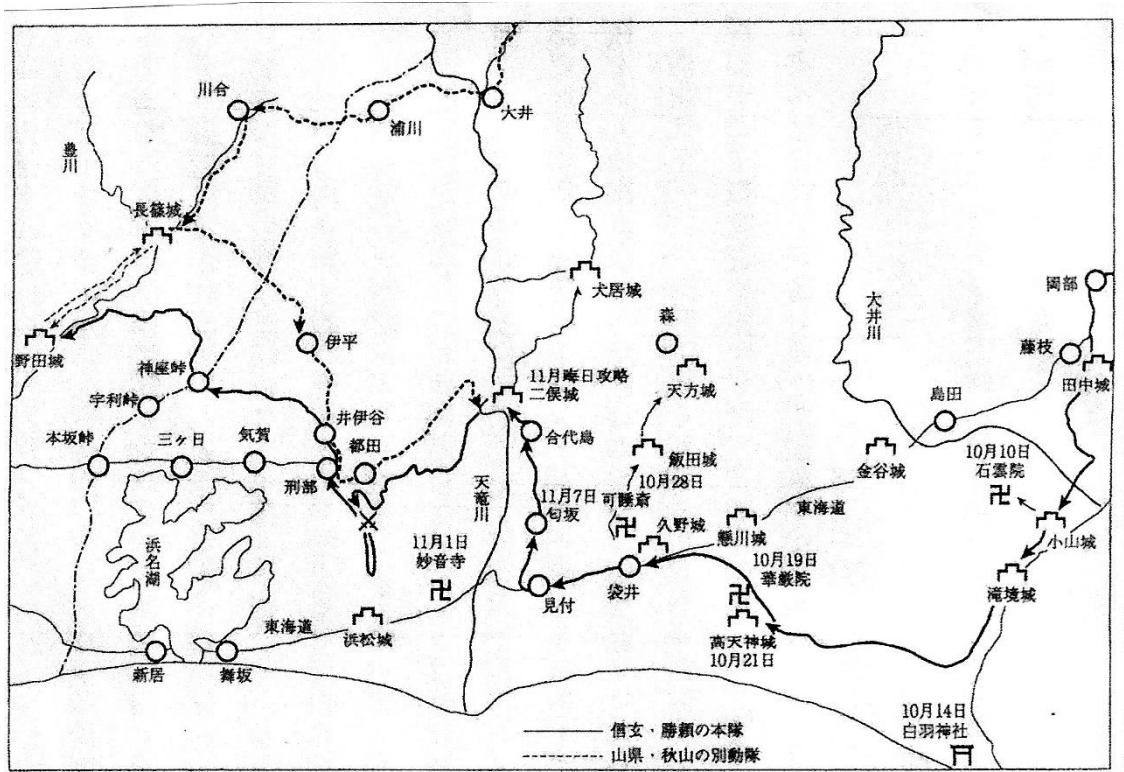


図 武田軍の遠江・三河推定侵攻ルート
 (本多隆成『定本 徳川家康』p.84・図26 (吉川弘文館、2010年) より転載)



徳川家康三方原戦役画像（しかみ像） 徳川美術館